
魔法少女リリカルなのはStrikerS Silber Traume

砕龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers Silber Tr
aume

【Nコード】

N5278T

【作者名】

碎龍

【あらすじ】

夢を見た。金色の髪と、赤と緑のきれいな瞳の女の人を夢を。

だけど、何かの物語みたいな素敵な出会いじゃない。

ただ、ただただ、その人は笑ってる。回ってる。クルクルとくるくると。

楽しそうに、幸せそうに、嬉しそうに、ただただニコニコと。

だけど、夢だと思えないんだ。だってその人は 残酷な笑顔で

笑って呼ぶんだ。私の名前を、誰にも言っていない私の名前を呼ん

だんだ。

人物紹介（前書き）

とにかくキャラ紹介です、読んで頂けると幸いですね！

人物紹介

クレス・イーリス

性別 / 女

年齢 / 9

役職・階級 / 時空管理局本局武装隊・見習い

機動六課での役職 / 前線フォワード部隊「ライトニング分隊」 フ

ロントアタッカー

魔法術式 / 近代ベルカ式

レアスキル
希少技能 / ????

魔導士ランク / 不明

魔力光 / 白銀

利き腕 / 両方（主に左）

容姿 / 銀髪の長髪後ろでくくり、その上に黒いバンダナを付けている。目の色は黒で背が低い

出身地 / 不明

使用デバイス / クライシス

見た目は明るい感じで人懐っ笑顔を持つ人物。

そして、まったく世間知らずで、常識をあまり持っていない。そのため変わった行動をすることが多い。

背は低く、エリオと比べるとやや小さいが、実力はFWメンバーよりも高い。

しかし、戦い方を知らず、決まった型が存在しないため、強い時は強いが弱い時は本当に弱い。

過去に何かあったらしいがその事を誰にも話したことが無い。

同時に記憶が一部欠落しているフシがあるらしいが、本人は全く気

にしておらず、逆にもう知りたくないとのこと。
ある二人の人物の事を尊敬しているが名前は知らずに「氷帝」という二つ名とその人物と一緒にいた金色のショートの髪の毛の二人を尊敬しているが、金色の髪の毛の人の呟いた「リュウヒ」ということが知らないということ。

だが、その人物の戦い方を出来るだけ真似ているとの事だが、まったく再現できていないらしい。

バリアジャケットは白と黒を中心とした白いジャケットと、黒い内服に黒い縁取りがされた白いスカートだが、バリアジャケットがあると云う事を知らなかった。

デバイス設定

クライシス「愛称はライ」

待機状態は、キューブ型の青い宝石それに鎖をつけて首からぶら下げている。

バリアジャケットには青い色が反映されていないが、武装には蒼が反映されている。

デバイスは他変形型で現在変形できるものは拳銃・ライフル・刀・斧・槍・グローブと多種多様だが、

クレスはライフル・槍・グローブに変形できるという事は知らない。性格は開放的でありクレスの良き理解者でもあり親友でもある。

カートリッジをすべての武装に搭載されているが、六課に行くまでは使われたことが無い。

人物紹介（後書き）

とにかくこんな感じですが、もともと自分のキャラじゃないので、
変な解釈を起こして間違いを起こす可能性が高いです！それでもい
いよってからは進んでくださいな！

第一話 始まり(前書き)

定期的に新しいキャラで主要キャラが登場するたびに、登場人物の訂正を行いますので、確認してくれると有難いです！

第一話 始まり

物心を持ったその時から私はここにいた。

自分の生まれた場所でもないココに……、誰も知らないこの場所に

……

私に生きる意味なんてない、いや、生きる価値すらないってずっと
思ってた。

勝手に作られ、勝手に死に、勝手に消えてゆく

それが自然の摂理だと、幼いながらも私はそう思ってた。

そして、白い服を着た人たちに連れてかれた時に、私は一つ思った。

これで楽になれるって、顔も知らない神様にありがとって思うほど
楽になれることを喜んだ

はずだった、それなのに、冷たい台の上に寝かされた時に、私の顔
に冷たい「何か」が伝った。

その時の私はそれが何なのか理解できなかった、それが何なのか

第一話 始まり

一本の大きな木の前に自身の腰くらいはある長い銀髪をなびかせ、額に黒いバンダナをつけている少女が一人、そこに立っていた。そして、後ろのほうよりヘルメットを被った男性が声をかける。

「おい、こっちの準備はすんだぞー、早くやってくれー」

「あーい、じゃあやるからおっちゃんたちは離れてねー、巻き添え食らっても知らないからー
やるうか、ライ？」

「あいよー、いつでもいいよー、マスター」

刀としては変わっている形状をしていた、それは鞘がついているのに、刀身を完全に包み込んでいるわけではなく、半分くらいを鞘で包み、先端部分が収まりきれず風にさらされていた。

「ただ、これはこれで気に入ってるんだ。刀身は待機状態の時の宝石みたいに青く綺麗だから。」

「って、いけない……集中集中……私は今、一閃の閃光……
音もなく敵を切り裂く一閃の……閃……k

「てえええいいい……!」

私をはじめて使ったデバイスでもあり、相棒でもあると同時に、今は私の大事な友達なんだ……

「クレス……あの話、考えてくれたか？」

つて、休憩所もとい、移住区に戻って休んでいると、おっちゃん……つて言うより上司、じゃないな……社長に声をかけられる。まあ、何が言いたいのかある程度分かっているから答えは一つ！

「……はあ、いつも言ってるじゃん……そんなとこに行きたくないつて、私はみんなと一緒にここで自然と戯れながら生きていきたいっていつてるじゃん」

と本人は気づいていないだろうが、クレスは顔をプクツと膨らませ、怒ってる様な表情を作った。

クレスは自然と戯れながらつて言ってるが……俺らの仕事つて伐採だから、環境破壊なんだけどな、とため息をつきながら話す社長……カイ……彼はこの会社の社長であるが、あの子、もといクレスのお陰で、お金のかかる重機をあまり使用することなく、100mを軽く超える大木を難なく斬り、それをばらし業者に売っているのだが、重機を使用した際のコストをグツと抑えることに成功しているのだが、あの子はまだ9歳、普通ならその辺の子供と一緒に遊ぶ年頃だ。

その辺といつても軽く200?くらい行かないと人里すらないし、今居るこの世界は、次元世界「グラスバウム」という世界だが、そ

れは名前だけで今はほとんど交流の無い世界だ。

……だから、そんなに人もいないかもしれない……
なぜなら、皆、仕事や快適な生活を求めミッドチルダと行った別の世界へと移動していくからだ。

ここにいるのは、みんな物好きな連中ばかり、木を切って、それをばらして、業者に売って金をもらって、たまにいく町でみんなが飲み明かして、金がなくなると、そこからまた木を切って……の繰り返しだが前の状態だったが、今は違う、クレスがここに来てから、重機をあまり使わなくなったから、大金が出来た、あの子のお陰で皆もそれを知ってるから、何とかこの子をこんな辺境の地ではないミッドのような都会で好きなことをしてもらいたい！

じゃない、都会の学校で普通の子のように育て欲しい！
……というのが、皆の願いでもあり、俺の願いでもあるのだが、クレスはこの話をまったく耳に入れてくれないのだ

「はあ……正直、お前まだ9で女だろう？ 本当はこんなところに居なくても……」

「嫌なものは嫌、って言うより明日はこの辺のでっかい木を斬って、それをばらしてみんなで帰るんでしょ？」

「ああ、アレは一際でかいからな、いつもは木を一回斬るだけだが、明日ばかりは輪切りにしてくれ
そうしたら俺達も作業しやすいからな」

「はーい、じゃあ、明日に備えて寝るねー、お休みー」

「あ、ああ、おやすみ……って、おいクレス！ まだ話は終わってない……ぞっでもう行っちゃったか」

半分くらい無理やりだったけど、早くおっちゃんから離れたかった。おっちゃん達の言いたいことは痛いほど分かる。

私の好きなように生きて欲しいって言うのは……って、すごい都合主義だね私は……

でも、私はそんなところに行きたくない、ううん、あんまり人と関わりたくないんだ……

何時誰が、私のことを気づくか分からないし……

「はっ！ いけないいけない……暗くなってたよ……それにもう寝なきゃ、明日もお願いな、ライ？」

「うん、わかったよマスター。おやすみなさい」

うん、やっぱり友達と話すこの時が一番いいな。そんな事を考えていたらいつの間にか眠ってたいた。

「なんで、そんなところにガジェットが出現したの？」

と金色の髪を腰まで伸ばした女性が椅子に座り正面にいる茶髪のショートカットの人物に話しかけたが、それよりも先に、金髪の女性の隣に座っている栗色の髪を片方でまとめた女性が口を開いた。

「たぶん、その周辺にレリックがあるんだと思うけど、何日も前からこのガジェット達は確認されていたんだよね？」

「そうなんやけど、レリックがあるのなら何かしら反応が出るはず

やのに待ったく出えへん
やけど、ガジェットをほうつとくわけにもいかへんから、二人に
相談したんや」

と関西弁で話す女性、彼女の名前は「八神はやて」

この部隊の……いや「遺失物管理部隊機動六課」の隊長である。

そして、先ほどの金髪の女性は「フェイト・T・ハラウン」。

さらに栗色のサイドポニーの女性の名は「高町 なのは」

と、機動六課の隊長陣が集まっていた。

そのわけは、少し前から管理外世界「デイズル」という自然が豊
かな世界になぜかガジェットが出現したのだ。

いや、していたのだが、そのガジェットの行動がおかしいである。

ガジェットは「レリック」に反応し、それを確保すべく動いている
はずなのに、今回のガジェット一型は、

特定の場所をぐるぐる回っているのだ。そこにレリックがあるわけ
でもなく。

それがたくさんあるのなら他の部隊が動いたかもしれないが、今回
現れたガジェットは三機で、

しかも一体一体別々に行動している上に、ぐるぐると同じ場所を回
っているだけなため、他の部隊から相手をされていないのだ。

その考えにはやても同調していたが、万が一のことも考え、この二
人に相談したというわけだ。

「ん〜、レリックがなかった場合、本当に骨折り損だけど、FWの
事を考えたらいい経験になるから、

私は行ったほうがいいと思う。」

「私もなのはと同意見かな……それよりも、はやても似たような考
えなんでしょ？」

「まあ、そうやね……って言っても、駄目って言われても明日けるように、アッチの世界でへりを借りあるから、もう拒否できへんし」

サムズアップをしながら話すはやて相手に、二人の目は点となったが、直ぐに笑顔となったと同時に、はやてらしいと二人同時に思った。

その後、はやてに失礼なこと思われた！と、言われ尋問のようなものが行われたとかないとか……

こうして、明日六課がガジェットを破壊すべく管理外世界へと向かうことが決まった。

そして、その翌日……機動六課のFWとその隊長達が次元世界「グラスバウム」へと向かい。それとほぼ同じ頃、クレスはというと……

「……すごく、おおきいです……」

「何いつてるのマスター？」

「え、純粹にこの木を間近で見た感想いっただけ」

とその手には昨日も使った青い刀身の刀を握られ、目の前には巨大な樹木が存在していた。

周りにも、このように巨大な樹木は存在し、特別これが巨大というわけではないが、やはり間近で見ると大きいのだ。

その木の周りには昨日はなかった重機が存在し、いつでも木を切れるといった様子である。

正直、私から見たらこんな一回じゃ斬れないって言うのが本音だというのは秘密である。

「クレス、もうちょいしたら準備できるからもうちょい待ってな
」

「わかったよ、そっちも気をつけてね、あと社長に一回じゃ切
れないから時間が掛かるって伝えて」

と返事をする、サムズアップしながら移動していった

一言で言うならダサイ……って言ったら怒るから絶対に言わない。

冗談では言うかもだけど
それにしても……

「今日はやけに静かだよ……動物の鳴き声もしないし」

「うん、いつもは重機が通ってもそれなりに鳴き声してたのに、
今日はまったくくしない……」

「何か……いるのかな？」

「わかんない」

本当に……本当に静かだ、これから何か起こるみたい……って、
これからこの大木を切るからかも知れない……

あ、これが理由か、結局私達の所為、か……仕方ないね、自業自得
だし……

「クレス！ 準備は整ったぞ！」

「あ、分かったよ！」

と、今回は大きすぎるから四方向からこの大木を斬って、斬り終えた後、この木をへし折って倒す……
こんだけあったら、しばらくは働かなくてもいいみたいだし、ちょっと気合を入れなきゃね！
だから……

「いけるよね？ ライ」

「行けるよ！ 今回は真剣だから…… Stand by OK？」

最後が疑問形になってるよっていう突っ込みはまた後で……
今は集中しなきゃ……私は閃光……すべてを貫く……これは違う音も無くてk

「ウェイー!!」

「え、ウェイー!？」

シュガン……

「あれ？」

今変な手ごたえが……気のせい……かな？
何か木じゃない何か別のものを……

「マスター？ どうしたの、私なんか見て？」

「ん、いや……なんでもないよ、あ、早く行かなきゃおっちゃんにまた怒鳴られるし」

「了解です」

「ッアーーーー！」

シユパン……

「もう突っ込みませんよ、マスター？」

と心なしに笑いながら話すライ……

ちえ、せめて突っ込んでくれたら面白いのにな……
それにしても……

「ホントにおおっきいね、この木は……4回斬っても、折れない
なんて……私が弱いつてもあるけどね……」

「気にしないでよ、仕方ないじゃんおっきいんだし、斬れなくても
も仕方がないよ」

「そうか」

「ク・レ・ス！……！ 斬ったら直ぐに……」

「「ごめんなさーい！……！」」

姿は見えず、声だけなのにその声の大きさの所為か、直ぐ側で叫んで
いるように聞こえ思わず走って逃げてしまった。

しかし、この時この場に居た誰もがまだ気づいていない……この時今斬っている一本の大木に向かって三機のガジェットが向かっていった、
なぜなら……そこにレリックの反応が現れたからだ。

その頃クレスはというと、仕事を終え待機していたが、他の人たちの計らいにより先に帰っていいといわれ、先に移住区へと戻ろうとしているところであった……

「ああ……怖かった」

「その割には笑ってるし」

「あはは、まあそれなりに面白じゃん？」

メキメキメキツ……！

と遠くから大木が折れ、倒れる音が聞こえてきた

うん、この音結構すきなんだよねメキメキって……いい感じの音なんだけど、

何て言ったらいいんだろう……なんか嫌な感じだ、悪戯して怒られてる最中の沈黙する時間くらいのこと……

って、これは関係ないね、うん……一応確認しに行ったほうがいいのかな……？

とりあえず、ライに……

「マスター……！」

「うひゃい!? え!? 何どうしたの!?!」

「さっきの木の場所に強い魔力反応がいきなり現れました! あと、それにつられて別の反応が二つカイさん達のとこに……!」

「え……? じゃあ、襲われているの、カイさん達は!?!」

「それは……分かりません」

慌てて、走り出した……ううん、跳んだって行ったほうが正しいかもしれない、

この森で普通に走っていったら時間が掛かる、

だから私は木から木へと飛び移るかのように移動してる。

もちろんその手には刀状態のライを持ったまま……

正直私なんか行っても、戦い方なんて知らないから……

でも、ここで戦えるとしたら……デバイスを持っているのは私だけだから……

急がなきゃ、もし襲われてたら……

「ライ! 拳銃に変わっておいて! 離れたところから戦ってみるから!」

「!……OK・Let's goo!」

ライがデバイスとしての音声が変わった……それほどヤバイ状況なんだ……急ごう!

くそっ……！ なんだってんだ、あの丸いふざけた機械は！？
やっど、木が倒れたかと思ったら、急にレーザー撃ちながら出てき
やがって……！
それよりも……

「おめえらー！！ 誰も怪我してねえだろうな！？ 怪我してたら直
ぐに逃げるよ！」

「おおー！！」

見たところ怪我人はいねえな……よかつたって喜ぶべきなのかどう
かわかんねえな……

重機のいくつかぶつ壊されてるし……それよりも、あの機械、何で
ここに……さっきは二体いた、

一体はそこでクレーンにコード伸ばして漁ってるが、もう一体は…
…切り株の上に行ったのか……？

とりあえず、だれか見えるやついねえのか？ こっから切り株の上
に顔出して、いきなりレーザー撃たれたら洒落にすらなんねえ

って、赤い光のようなものが出てる……なんだ？ そついや、クレ
スがいらない……あいつはどこ行ったんだ？

このまま、やり過ぎすことが出来たらいいんだが……

ドドンッ！

この銃声は……

「クレスか！？」

「嘘お……………」

実弾なんてものは持ってないから私の魔力を絞って撃ってるんだけど……………」

それでも結構威力はあるんだけど、あの丸い機械……………私の魔力弾をかき消した？

しかも、こっち向いちゃったじゃん……………しかもなんか赤く光ってるボックス持ってるし……………
とりあえず……………」

「ライ、モード変更、斧に変わってくれろ？」

「A l l r i g h t .」

持っていた銃……………ライが光だしたと同時に、手にあつた感触が変わった、

もちろんそれは、でっかい斧、これなら……………」

「……………振り下ろせば、そのまま壊せるんだよね！！！」

一瞬で、枝を蹴って、大きな切り株の上にいる機械目掛けてまっすぐ突っ込む、

丸い機械が私に向けてレーザーみたいなもの打ち込んできたけど、それはライが防いでくれた。

シールドを張ってレーザーを防いだお陰で目の前が閃光で包まれて見えなくなるけど……………」

その時点で既にライを振りかぶってるから、後は振り下ろす、それだけ……………」

「なんだよねっ！」

ヒュン……！

一瞬、当たったと同時に手が痺れた……まあ、それでも真つ二つに割ったんだけどね、

そして、分かったんだ、この機械がさつき魔力弾をかき消したのが、
だけど、今はそんな事考えてる場合じゃないんだよね
私のやるべきことは……

「おっちゃん！ これ持って遠くに逃げるから！ その間に避難してね！」

「はあ！？ おい、クレス……！」

おっちゃんの言葉を無視して、その場から離れる……

もちろん、木から木へと飛び移りながらだ。

そうしたら、重機をいじってた機械が私を追ってくる。

やっぱりこれが狙いなんだ……

だったら、おっちゃんたちから離れた場所でこれを捨てればいいんだ……
だから……

「ここから逃げるよ！ ライ、あの機械が攻撃したら教えて！」

「yes・sir！」

ヘリのコックピットに警報が鳴り響いている。

それまで、穏やかそうにヘリを操縦していた、パイロット“ヴァイス・グランセニツク”の空気が一変する。

その様子から情勢はあまり優れない。緊迫した状況だ。すると、ヘリ後部よりなのはとフェイトから連絡が入る

『ヴァイス君！ 一体どうしたの！？』

「なのはさん！ レリックの反応が現れたと同時に、ガジェットも移動を開始したんですが、
そのうちの一機が破壊されたと同時に、レリックが移動を開始しましたー！」

『そう……じゃあ私達も出るよ。私とフェイトちゃんは空から……FWのみんなは地上から、レリックの確保を！』

『了解！』

通信越しに聞こえるFW四名の声を聞き、一気に気を引き締める。が、それと同時に新たな警報が鳴り響く、それはもちろん……

「なのはさん……どうも一筋縄じゃ行きそうにないですね……ガジェットのエイトのI型II型が多数現れました！」

「……っ！ 分かってたけど、しつこいね……」

「捨てようにも、万が一の事があります……せめて安全な場所で捨

てたほうが、いいのですが……」

「うん、ぴったり私の後を追ってくるね……攻撃も交えて……っ！？」

慌てて、隣の木へと移動するクレス、その直ぐ後にレーザーが通り過ぎたのだ

同時に左腕に痛みが走る……怪我をしたであろうその場所には赤い線が走り、赤い液体が滴る

怪我した場所に手を当てたくても、右手には刀、左手には大きなボックスを持っているため、それが出来ないのだ。

同時に痛みで涙が出てきそうになったが直ぐに前へと進む。

「マスター！？」

「平気だよこれくらい……それよりもあの機体の動きを見て……今は腕だったからよかったけど、足だったらもう……動けなくなるから。」

「了解です、マス……っ！？ 正面より一機来ます！！」

「えっ！？」

目の前を見ると、真下より一機上がってきていたのか、クレスが次に飛び移ろうとした木の枝に一機たたずんでいた。

その場所をふさぐかのように、内部よりワイヤーのようなものを出して壁を作り、そして……

ぴん……！

至近距離でレーザーを放たれたと同時に、体を大きく捻り直撃を避けた……が、

「つう……！」

体制を崩し、枝へと着地することなく地面へと落下するクレス間一髪のところで受身を取り、地面を転がり、体制を整え再び立ち上がるうとすると、

足に先ほどとは明らかに違う痛みが走った。

なぜなら、先ほどの攻撃はただ掠っただけであつたが、今度の攻撃は太ももを貫通したと同時に、痛みで顔が歪んだ。

「くう……さつさと捨てれば良かったかな……」

「マスター!？」

そのまま、上にいた機械は、地上へと下り、地上に居た機械と合流した

それらから逃げようと、もう一度体に力を入れると、全身の筋肉が一瞬で悲鳴をあげた。

それもそのはず、彼女はまだ9歳、体はまだ成長しきっておらず、更にはなれない運動の連続で

既にその体は限界に達していた。

そして、悟る……逃げられないなと……

「やっばいなあゝ、こつからだとかれ捨てて、逃げても追っかけられて殺されそうだしなゝ」

「そんな事言ってる場合ですか!?! 早く逃げなきゃマスターはこ

「こで……」

そうなんだよね、逃げなきゃやられるし、目の前の二機は攻撃しか
けようと、

黄金色のレンズを光らせてるし……

まっずいなあ……左腕からは血が流れているし。その血で服は赤く
ぬれてるし……

終わったら絶対にシャワー浴びよ……絶対に
そのためには、まずこいつらを……

「……叩き潰さなきゃね」

「ッ!!……yes . s i r」

先ほどまでの軽い雰囲気とは明らかに違う、

殺気が入り混じった瞳で二つの機械を見据えたと同時に

刀を構え、まっすぐに突っ込んだ……この時、他の地点よりクレス
の持つボックスを見ている黄金色のレンズが多数あるのはまだ気づ
いていなかったが……

「社長！ 全員非難完了しました！」

「そうか……全員無事……じゃないな……今いる奴らは無事なんだ
な？」

「はい、怪我也比較的軽いのでほとんど無事なんですが……」

「そうか……じゃあ、じゃあ怪我を見てやってくれ」

「分かりました！」

「ふう……」

……本当に怪我人が出なくて喜ぶべきなのかどうかかんねえな……
人的被害もほぼ皆無だし、重機なんて壊れたら、いくらでも買い換えればいい……
だが、あの子は大丈夫なのか……？

「よっしゃ、撃破したよ！ティア！」

「まだまだたくさんいるんだから全部倒してから言えっの！」

「ふう……分かってるよお」

「でも、かなり減ったんじゃないですか？」

「そうね……キャラ？ レリックの反応まで後どれ位？」

「もう直ぐです！」

オレンジ髪のツインテールに紫の短髪の女性。後、背が低いが赤髪の少年にピンクの髪の毛の女の子、キャラが息を切らせながら話す。余裕の会話に聞こえるがだいぶ息が上がっている。おそらくかなりの長い時間を戦い続けていたに違いない。
残りの背が低い2人はお互いをカバーしあって上手く戦っていた。

事実、その四人の周辺にはガジェットの残骸があるのだから……

そして、青色の髪の女性が突っ込みガジェットを破壊したと同時に、攻撃が止んだ……否、すべて撃墜したという意味である。

そのまま、

「三人とも行くわよ！ 空じゃなのはさんとフェイトさんが戦って
くれているんだから！」

「了解！」

とその場から移動し、少し進んだ先にある崖を下る、そこで彼女たちを出迎えたのはこれまでよりも数が多い、ガジェットの残骸であった。

これをみた四名は思わず足が止まってしまった。ガジェットの残骸が散乱し、あたりの木々がへし折られていたり、切られていたり、焼きいられていたからだ。

更に足を進めると、それは今までのそれよりも酷い光景だった。地面は爆発により抉れ、木々を見るも無残に粉々に粉碎されていた。空爆でも受けたかのような焼け果ての様子に掌に汗を握らせる。

そして次第にそれは緊張へと変わった。それに気づいたのは青色の髪の女性、スバルであった。

「ティア、これ……」

と指差すのは奇跡的に残っていた大きな岩

その表面に点を打つ紅いモノ……血だ。それは大地を所々を朱に染め上げている。

「これは血……よね」

確認するようにオレンジ髪の女性、ティアナは指先でそれに触れる。まだ、乾き始めたそれはまだ時間がたっていないのだろう。

経過時間がそれを知らしめるように粘着性が出てきたそれは彼女の指に纏わりついた。

そして、周囲を見ていた赤色の髪の少年が驚きの声を上げ、皆に伝える。

「スバルさん、ティアさん……こ、これ……」

「どうしたのエリ……オ……」

そう言つて振り返つたそこには大きな岩しかない。だが、その岩に問題があつた。血の毛も引く。彼女はそれを直に感じた。

それを見つけたエリオと同様であつたが、あまりにも生々しいその光景に四人は大きく喉を鳴らす。

壁にはバケツの水をぶっかけた様な状態だつた。赤塗りのペンキは大きな岩のパレットに血のアーチを描いていた。

身体を預け、そのままズレ落ちたようにも窺えるそれを前に彼女たちは意を決して通信を入れる。

「こちら、スターズ。人間のものである血痕を確認しました。救護班の要請をお願いします」

『はい、了解です。負傷者の方ですか？』

「おそらくは、これから引き続き捜索を続けます。おそらくこの近辺に身を潜めているかと」

通信するティアナの脇で周囲を警戒する三人、するとキャラロは黙認した先にある何かを見つけた。注意を怠ることなく、それに近付くとティアナを呼びつける。キャラロが指さしたその先には先ほどと同様に粘着質な何かがあった。

「ティアさん、これって……血痕ですよね？」

キャラロが見つけたのは等間隔に打たれた血痕だった。それは岩にあったものと同様に乾き切っていない。

「この出血量からして悠長なこと言ってる余裕はないみたいね」

「急ぎましょうー！」

四人は先を急ぐ。その行く先を決めるのは血痕であった。等間隔であったそれは間がどんどん小さくなっていく。そして次第にそれは連続する帯となった。

それを目で追った彼女たちはその先の小さな洞窟があった、彼女たちはその視界に血痕の主を見つけた。警戒してか物音をたてないように近づいた。真つ青な顔色、虚ろな瞳、銀髪だった髪はところどころ赤く染まっていた。

そして足を押さえていた、そこから出血が夥しく、小さな水たまりが出来上がっていた。壁と背中の間にはボックスがあるが四人からは見えてなかった……

「ちょっと、出血酷い」

「スバル、止血するから手伝いなさい、キャラロ、ガーゼ持ってる？」

と怪我を治す準備をしながら、近づいていくと、虚ろな瞳のままこ

ちらを……四人を見た
そして、右腕に光が集まり、一本の刀へと変わったと同時に、それを四人へと向けた……
それを見た四人は、驚いた、なぜなら、これほどの出血をしているのにまだ動けるのかと……
そして……

「……やっと……終わって……シャワーを……浴びれると思ったんだけど……まだ……居たんだ……だったら」

と虚ろの瞳のまま呟く、肩を上下させるその様から状況が思わしくないのが明白だ。

「安心してください。管理局、起動六課です」

「……局？」

「ええ、救護班の応援も呼びました。貴方を保護します」

とティアナが説明している間にスバルがクレスへとゆっくりと近づいていくと、持っていた銃が刀へと変わりスバルへと向けられた。

「ちょっと、どうしたんですか!？」

そう言って近づいてくるスバルに彼の敵意が向けられた。

「……もうやだ、あんなところに……二度と……だから……来ないで!」

「スバルさん、危ない!」

一気に立ち上がり、刀を構えながらスバルへと接近し刀を振り上げた……が、
刀を振り上げたままスバルへと倒れこむ形で完全に気を失った……

第一話 始まり(後書き)

そして、一言。死ぬほどむっずい。実際合財、友人に電話で聞きながら話を書いてたけれど、うん。何で他の方々はあんなにスラスラ書けるんだろう？

っと、今回はこれで失礼して、新しく次書かないとなー
だけど、遊戯王のデッキ構築もしたいなーw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5278t/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS Silber Traume

2011年10月9日02時22分発行